高津送球外史

高校５期　(1953 年卒)　　額田　晃作

今日できなかったことも明日は必ずやってみせる。低空飛行でどこまで飛べるかが人間の値打ち。

このような文句を並べるイヤな者に育てたのは Kozu Handball で。目をつぶるとアイツもコイツもあの頃は頭が良かったのか次々と彼等のことが浮かんでくる。それも青春と言う不安定極まる舞台に。

私の父は高津中学２期生でショートを守って一人でトリプルプレーの伝説を持ち。50 才で我家の廊下で空転をやってみせたり、開業医で大阪初の歯科医ながら医博をとったり、30 才で枚岡町長と気が多い。パージにならなかったら国会へが、塩川氏を応援して取り調べ延々に、母の心中をみかねて府警 4 課へ救出？に行った。当然、高校に入れば野球部へと思い予選から倉敷商業　小沢のカーブに敗けるまで見ているが。合格して「野球部へ入りたい」に対して、後援会長をしていた父のことが浮かんだのか、その返事が「フーン」で気分を害した。中学はサッカーだったので手でやるサッカーが送球かと大転換。もし、野球一途なら ART の道は好き程度で平和な人生であったのに。

１年生は送球一筋。軍国教育から自由な空気あふれる高津のグランドの空気を吸った。

KOZU 送球部は橋本靖雄(高 3 期)ヤッサン以前がよくわからない。ヤッサンの上に私の小・中、同期の稲田君の兄が送球部にいた。ドイツの女子体育のために創られたそれが同盟国　日本の教育者に広がったと私の従兄は解析している。未だマイナーの感があるのは地味な社会層？から広がったことも原因である。

とにかく、食うや食わずの食糧事情で育った１年生は呆然とする程シボられた。当時は３年生でも現役でヤッサンがハーフセンターで攻めて守って、ウィングに阪大・心臓外科のガッチンこと中田、秋田の精神科教授の菱川、学校の近所に住む乙田、キーパーは調子のよい林七郎、彼は赤鉢巻を巻いて卒業後も指導に来たがどういうわけか自ら死を選んだ。バックは津田、関東で薬局チェーンを展開。私の小学校先輩の菊山さん、小柄ながら男前、ヤッサンに合宿の練習時間が長すぎると値切っていたがアカンの一言。自分で人の３倍位の練習量こなすヤッサンには同級生も従順であった。

２年生の桃山学院の先生で勲章も貰った奥田一郎、フィールドとはいえ相手の頭上を越す球を投げその背後に廻り球を操るドリブルは他にいない。高島屋の井斗。いつもニコニコの木村。京大、三井信託、太閤園、椿山荘の倉田、三井信託の検診に行くと副支店長でうなぎを奢ってくれ、太閤園では総支配人にヤッサンとこの米を買ってくれと頼んだがペケ。厨房は独立国家であることを知らされた。同窓会を関東煮でもよいからと値切ったら本当にそれを出してきたのには驚いた。真面目な人である。ユーモリストかも。

ヤッサンはめったにない大学対抗とか一般人の東西対抗戦を見に連れて行ってくれ

た。印象的なプレーがあった。東西対抗でナイターであった。白いユニフォームの選手がパスミスでこぼれた球に猛烈にダッシュ、止まらないで球を拾う。地面すれすれ、つんのめるが、そこで空転、何事もなく味方にパス、訓練の賜物か。体育大卒であろう。狭い室内7人制では見られないプレーである。法政－関学戦で見た顔があった。小中の友人竹村恵一で桜塚から関学のハーフセンターに入った。今、三つの癌を手術、アレルギーで麻酔を打てない歯科医学と言えない方法で噛める工夫も楽しい「俺より早よ死ぬな」「当たり前じゃ」「キンベエは俺の言うことは絶対に聞く」「癌のマーカーがまた上がった」とケロっと言う。それで跳び廻っている。

私も白血球 23,000 となり、入院したが「言うてることとデータに差があり過ぎる」これはシボられたことに耐えたせいかもしれない。

ヤッサンも前立腺癌を手術した。kozu 時代と同じ顔色で、一緒にゴルフした人は上手とは言わないが「スゴイ馬力しとるで」。水泳のコーチに運動し過ぎないように釘を刺されている。奥様は「時代劇が好きですねん」と子供のようにあつかっている。この文章のトップに書いたことは彼が口に出したことではなく、私の最も吸収し易い心を持っていた頃、彼に出会って私の生き方に、体にしみ込ませた。美術部をリードする立場になった時、佐々木先生が私のやることを一言も苦言を呈することなく放牧を許して下さった。長期にわたって、日本の美術教育界のトップを維持でき、その中で生まれた世界美術界に知らぬ人もない森村泰昌君（高 22 期）が「体育系美術部」と言っているのは高津の栄光を見事に表現している。しかし、ヤッサンは展覧会を見に来てくれるが興味を持っているとは思えない。私の一人相撲でもよいのである。

ハンドボールのマイナー性は、他のスポーツでは考えられない。勿論、11 人制でフィールドプレーであるが 11m ラインは、最初は神域でキーパーのご座所であり、踏み込めばラインクロス。次にシュートを打ってからなら倒れ込んでよい。次にライン前で踏み切りジャンプシュートも OK。それを伝達する機関が不備で「あれは反則やないか」が公式戦で知るのだから後進国はつらい。「オフサイドてなんや」と言う時代もあった。

雨中戦と言うのは、まさに泥沼で女子でも晴雨不問。特に藤井寺の軟泥は酷かった。全身泥まみれ。ボールも投げると言う状態でなく腹から腹へリレーして何とかゴールへ投げる。キーパーも足を取られて動けない。我々の貧しいチームは 11m のゴールへ普通でも届かない選手がいたが、この雨中戦はシュート・パス？がよく廻り、私の打ったシュートがバーに当たり、ドロドロで白線が見えないゴールへバシャと落ちた一瞬、間を置いて線審を務めていた奥田さんが手を挙げた。これで一つランクの上の大会へ出ることになるのだが、他のチームに「ようこれで出てこれた」と感心？された。先輩より譲られたラクダ色の下着を海老茶に染め、それに白襟をつけ、個性的にはげたユニフォーム。それが行きわたらないものもいる。ストッキングはどうしていたのか、もう思い出す人もいないであろう。

ニードルとは？送球に何の関係があるのか。ボールは皮の縫い合わせでチューブは

ゴム製。もちろん、ポンプで膨らますが皮ひもでその穴を靴ひもを締めるように先に穴のあいたニードルで通して行く。それは練習のはじめに空気を入れ、終わると空気を抜く。そのままだとボールの丸さは保たれず、サッカーボールのように膨張する。ニードルで誤ってチューブに穴を開けると自転車屋へ、練習はボールなしの基礎練となる。松ヤニを手につけ、片手で球を操る時代は夢のまた夢であった。当時は練習試合でも公式戦でもボールをチームが１つ宛レフェリーに渡す。ボコボコの球では恥ずかしい。

明日は公式戦というのに部室のない我々は東体育館の北にあった。体育教官室の部屋の荒木先生の一番下の引出しに入れて持って出るのを忘れていた。田島町のお宅を探して教官室を開けて頂いた。先生は朴訥というか最初の授業に「パレンバンに降りた中村中尉は言った」と kozu に珍しい右翼系の方で陸大か陸士、遠足に陸軍の雑嚢を腰に提げておられた。東大卒の国語の先生を意識されていた。生駒に転宅され、私も結婚後十年、近くに住んでいたが訪ねなかったことが悔やまれる。白髪になっても生徒の先頭にたってランニングされていた。

部室のないクラブは、教官室を自由に出入りし、ボールを収納していた。私の日が暮れてからのクラブである美術部は、芸能科教官室を完全占拠し、ストーブで弁当を温め、書道の先生は書道の部屋へ、音楽の中村道之助先生と冗談を言いあったり、芸術雑誌、蔵書を見放題。画材の販売まで佐々木先生が面倒を見て下さった。まさに栄光の陰に先生方の忍耐強い環境作りがあった。

体育教官室は更衣室にはならない。運動場の北隅の校長官舎のある高台の階段で着替え、柳の芽の成長を見ながら、雪の日は震えていた。練習中、野球部の遠慮のない打球が飛んで後頭部にライナーが当たる者もいたが、あの頃は頭が硬かった。

さすがに、教官室での物の出し入れはまずいと判断されたか、昇降口前の部室の長屋の一つが与えられた。なぜかこの部屋のことは記憶に乏しく、夏の練習後、ボトボトの長袖の練習着（ユニフォームとは程遠い）を屋根に放り上げて、明日は固まった汗をもんで、臭さも感じず、練習していた。戦後 5 年程が焼跡の草は生えているのに不潔という言葉はバンカラの油を塗った学帽・下駄履きが通用していたから、それが流行というより、この時代はこのような時代であった。合宿するのにクーポン券が無ければ主食が買えなかったのだから。

考えて見れば、人材として人格の秀でたヤッサンも決して世間の中で優遇されていたとはいえない。戦後の動乱が後を引き、縁故をたどり、職を得る。大学へ進んだ 4 年間で世間が好転して軌道に乗った人もいたが、そうでない人もいる。「クラオ」こと佐々木藏雄さんは、ヤッサンと同期、近所に住み、卒業後、道頓堀の東にあったマンションという宿？の支配人をやり、写真学校の先生をやっていて私の展覧会のパンフレットの写真をお願いしていた。国鉄天満駅の側のビワ湖の開発とかで水中で映画を映したり、湖底に遊園地の絵を描いてほしいと、3, 4 人の男のいる部屋に一緒に行き、それから名古屋から家へハガキが来た後、音信も姿もない。私と同期の一人も不明な人もいる。戦後は未だ明けきれていなかった。好人物の乙田さんは在東京でどんなお

爺さんになっているだろう。

私は、クラブをリードはしてきたが決してキャプテンではない。同じ駅から通う樽本君がヤッサンの指名で次の奥田さんに伝え、そうなった。2 頭政治というわけでなく、試合になるとタルが私を見る。私が首を振る相手と先攻後攻を決める。それまで練習のリードを私がやってきたこと、2 人の仲が悪いこともなく、彼がキャップであったから、絵画部もやってこれたと今になって思うが稀有なる一例である。

いつも笑顔だった平山恵一君は同学年で一番早く亡くなった。南の私立病院で腹部に丸く膨らませた囲いに布団をかけていた。抗生物質のない時代、腹膜炎だったか自宅のお通夜でお母さんにもっと居てやってくれと頼まれた覚えがある。

昨年亡くなった芝田君は、名前も同じ明正堂のカステラ屋さんでアルバイトに行った部員も多い。乳業屋になり、不思議に思っていたら、兄上が農水庁の No.2 であった。我チームのキーパーでバタンと倒れて球をつかんでいた。先生になった篠原君、大阪銀行の田原君、石切に住んでいた森田君は労働基準監督署にいた。

一年下の茶道大阪支部をまとめる井上君は、青年の如く元気で昼飯を奢ってくれる。斗酒なお辞さぬ山中君は、兵庫県歯科医師会事務局長をやり、昨年、亡くなった。

私（インナー）からウィングへパスを出す位置にいた北中君は、サウスポーで鋏取りの Catching でよくボールを落としたが繊維業界不振の中で盛業である。

この 11 番ポジションは、個性的な選手が多い。舟橋君は、ラインぎりぎりまで逃げて軟投でカーブをかけキーパーの背後に落とすフィールドならではのシュートが得意であった。西君の左で踏み切る滞空時間の長い姿勢から撃つシュートは切味があった。慶応へ行った西原君も、左足で跳び、抜け目のないプレーはエース浅野の豪快さといいコンビであった。

榎本、津田が関学へ入り、高津送球部に黒船が来た。友人のプレーヤーも連れて来て、強くなるための練習には納得させられた。キーパーのゴンベエこと石崎の足を縄でくくり、何度もゴールポストで跳ばす。ユニフォームが砂で切れて血がにじむ。それをご両親が見ておられた。その妹がハンドボール部へ入って来たのだから、両親の見識の高さが判る。

この西原の同時期に、西田、浅野、生野と京大に入り、京大は一部昇格を果たした。ハンドボール部は、伝統的に学問にも他のクラブ以上の頭脳をもち、努力をしたのである。この西田が夕陽丘中学の生徒会長で、なぜかハンドボール部へ入って来た。会長が入っているクラブならと中江義雄君が入って、先述の西君と同期で、1 年生なのに強肩であった。足の速さと強肩は持って生まれた要素が多いと私は思っている。彼は、同志社で監督をやり、朝日新聞へ入り、運動部志望が販売へまわされたが、実績を上げ、局長から日刊スポーツの社長となり、ハンドボールの社会的地位向上になくてはならない人物となった。

高津で唯一、ユニバーシアードへ出場したのが浅野君で、私は、政界向きの人物と思っていたが、東京銀行へ入り、専務でロンドン支局長を兼ね在阪時、急死した。同窓会長にしたい人物であったのに残念である。生野は證券業界で社長を務めたが早世

した。大賀は銀行マンとして小粒ながら大物となり、相手のパスが出るところになぜかいてチームを救った。

バックスで特筆すべきは徳山である。テッパンともテッチンとも仇名され、細身ながら体ごと当たり、Fight の固まりであった。在日ということで、当時、国体へ出られず、東大へ 7 回挑戦して合格した。3 期の吉村氏と東大 2 人目で、フェニックス学院長となり、私の東京展で長時間楽しく語り合った。脱皮した好人物になっていたのは努力のせいであろう。本当に 7 回か電話が通じず残念である。

男女のコーチャーを熱心にやってくれて最も慕われた前田君は気の毒であった。久しく会うことなく、訃報を聞いて驚いた。余りにも若く、出棺直前、母上が棺にすがられた様子は目に焼きついている。原因が口腔癌であったと聞き、私に言ってくれたらとショックが大きい。

クラブの顧問というのか部長は、私の時代は荒木先生であったがコーチをやり出して、田中さや先生になった。その経緯は知らないが、女子学生の評判は決してよくなかった。ついに合宿時、泣きわめいて怒り狂われたのには唖然とし、コーチの仕事はこの先生をなだめることからと気がついた。原因は、選手の些細な言動で、理解ができなかった。意外と早く体育科でない今中先生に変わってよかった。先日の OB･OG 会で田中先生を高津へ岡本先生が連れてこられ、鳴川先生（バレー外大教授）もそうであったと聞き、教育委員会に振り回され、高津で決められた時代があった。それなら・・・と思うのである。

キャプテンが林毅君の時代に最高の成績をあげた。未だフィールドの時代で、バックスが 3 人まとわりついているのにドドッとフェイントをかまし、シュートを撃つ迫力は、浅野の凄いロングシュート、中江のコンパクトな振りから強い球が出るのと一味違う見もので、後に室内で見せた佐藤 3 兄弟の二男の腰の回転で放つ球、川上（全日本学生選抜選手）のハンドボールらしい機を見るに敏なプレーに遺伝子が感じられる。

私と同じ大歯大卒で彼は「今まで苦労していないので苦労して来る」と阪大口腔外科へ行った。林らしい決心で、私も腫瘍等患者をお願いした。

あの学年は達成感があったのかピテカン（渡辺）、井口（英語教授）、斎藤、増田と彼等の団結力は強い。増田は卒業前に姿を消して一騒ぎがあったが、私も夜呼ばれて高津へ行き「どこへ」ばかりで「なぜ」は今も知らない。

私は歯大の試験、展覧会の制作、作ったばかりの高津クラブの練習と三重苦の大学生活を送り、その連続で複雑怪奇な一生となった。頼まれ事や自分から進む道が枝分かれし、減ることがない。服む薬も増えるばかり。しかし、送球で得た「もの」が可能にしてくれる。「何でも来い」である。書けばこの何倍もあるが、ご迷惑は目に見えているので、この辺で。